

成澤寺かわら版

第13号

発行日
平成31年4月10日
発行
時宗高階山
成澤寺



「役員寺院研修」に参加して

小田 秀子

昨年の夏、「役員寺院研修」に初めて参加させていただきました。

その日はとても暑い日で、日差しを避けながら、檀家の方々と見学場所に、ぞろぞろと連なって歩きました。総勢二十一人。子供の頃の遠足気分が蘇りました。初めてお会いする方が殆どでしたが、檀家という縁でつながっているんだという親近感がどこからともなく湧いてくるのが不思議でした。

聖塚、長光寺、伯濟寺、黒石

寺を見学し、「プラザイン水沢」で昼食を摂り、道の駅「来夢」で買い物をして帰途につきました。盛り沢山で、充実した内容でした。

この研修で、特にも私が興味をもったのは、江刺市にある「聖塚」です。愛媛県生まれの一遍上人が、一二八〇年にはるか北方の「聖塚」を実際に訪れていました。

このことを私が知ったのは、十数年前、図書館で国宝「一遍聖絵」を目にした時です。雪景

色の中を、裸足に下駄、脛はむき出し、薄着姿で奥州路を歩く、一七人の一遍上人一行の姿がありました。とても、冬には似つかわしくない服装だと思いましたが、それだけに何か、必死さが伝わるような気がしました。聖塚は人里離れた山の中に、それと分かる形でひっそりと存在していました。

これこそが、あの聖塚かと思った瞬間、七〇〇年前にタイスリップしたような錯覚と、不思議な感動をおぼえました。



一遍聖絵

掲載している写真は、同じ「一遍聖絵」の二二巻、「兵庫の観音堂で臨終を静かに待つ一遍」の絵です。これは私が一針一針クロスステッチをして刺繍したものです。在側に座る大柄な人物が一遍上人で、並びに偉い和尚様方、対面して一遍を聖と仰ぐ尼僧や時衆が最後の説法を聞いている図です。

「一遍聖絵」に関心をもったことが、こういう作品になりました。市内に広大な敷地を有し、鉄筋コンクリート造りの近代的な長光寺、伯濟寺については詳しく述べる余白がなくなりましたが大変勉強になることばかりでした。何よりも温かく迎えてくださり、うれしく思いました。初めての参加でしたが、檀家の皆様と交流できたり、高校時代の友人と旧交を温めることができ、参加して良かった心から思っています。

供養絵額見学者来山

三十一年二月二十二日土沢地域作り会議主催で東和町の寺院めぐりを企画され、当山にも来山されました。私もあまり供養絵額のこととはよく解らず、あの世に旅立った人を偲んで供養していること位にしか思わずにきてしまいました。が近年絵額を見せられてという学生さん、博物館等々があり、なんとか説明するべく努力しても中々難しいものがありました。しかし、今度諮らずも専門家が知られてよく調べられ、近辺の状況が分かって参りました。せっかく専門家のご苦労して調べられた資料をあまり紹介するのは失礼にあたりますのでその一部のみお許しを頂いて少しご紹介いたしますと、絵額の分布は遠野市が圧倒的に多く二百二十三点もあり、ついで花巻市八十、紫波町五十二、北上市三十五、盛岡市二十六となり、市内では石鳥谷町二十八、東和町五十二となっている。はり遠野市は十王堂も現存し、古いものがよく残されており、また行事を始め催し物が昔の形式を大事にしており、驚くこともあり。民俗芸能の宝庫のように代表されてもい

ます。観光客用に観光ルートが用意され、人を集めて研究に供されている。さて、東和町はどうかというところ。花巻市の中ではわが町が中心を占めているように思います。町内の寺院数をみても十ヶ寺あり、大小の神仏を合せると相当な数にのぼると思います。古来より信仰が生活の土台となってきたようです。

次に絵額の製作年代は江戸期三、明治五〇、大正一六、昭和二となつていきます。明治が多いのはやはりこの期は生活が安定した時代であったかもしれません。また開発精神、向上発展の時代でもあったのででしょうか。人口密度も高いものもあつたてでありましょう。絵額に描かれております晴れ着を身に纏い、ご馳走を目の前に置き、当時の充実した生活を求めております。戒名が記入され、逆修(生前戒名)まで書かれ、長生きするようにと祈っております。その絵の色彩は今では手に入らない貞殻を擦って出す青が使われています。青はあの世を表すと聞いております。ついでながら白は死者、赤は魔除け、黒は悔みと使い分けられたようです。案内する人はあの絵の青とこの絵の青とは色合いが違う点

に注意喚起しておりましたが、これは江戸期の文久時代の青と近代の絵の青との違いを指摘されたように記憶しております。時代を遡るにつれて手が込んでいくし、苦心もして良い物を出してきている。

次に来迎図に移動され阿弥陀如来が死者を迎えに金色の雲に乗り、両脇には観音菩薩、勢至菩薩を従え、一歩前に足を出され、お救いに積極姿勢を示されておられる。救わずんばおかないとの必定の姿であります。この姿に死者は絡めとられていくのであります。よく見ると今まで気がつかないできました。二人の死者の上には戒名が書かれておりました。今までのいい加減に見てきたのです。蓮台でしょうか、ハスの華は緑色でした。その上に死者は立っています。ここに来迎図をもつてきている

のはこの寺の信仰の中心でございまして。まさに他界観を目で学ぶように出来ていたのです。絵額もまたほとんど生活型であります。そして専門家によって分析された観点に生活要素極めて重要と書かれておりました。まさに生活そのものが信仰ですと云っているのです。本堂(道場)内にはいっぱい生活を見せている場面が溢れております。あの世とこの世は別々ではなく一緒です。生死一如、生と死で初めて一つの世が出来上がっている私たちです。空、海、人一つ、その一つに帰る、回帰する。もつと言えば衆生(過去仏、現在の人、未来人)と供に福祉に邁進するわれわれであります。見学者各位はどのような所感をもたれたでしょうか。尊いことであります。合掌

川柳

特殊詐欺

抜いてやり度い
騙す舌

文化遺産

スネカの角が
太くなり

岳春

※「祖上人七百年忌」で本山参り希望者はいませんか。九月か十月を考えております。宗教的行為は本来見返りを求めず、目的をもって動かず、比較せず、疑もたずです。一遍上人の捨身供養願うはその最たるもの。